

## 「猫式」夏の過ごし方

矢杉 麻衣

暑い。

さつきから私、猫のしじみの頭には、この言葉しかなかった。わが家の廊下に、べろーつと寝転んで、うちわでどんなにあおいだつて、むっとした熱気しか来ない。

「あーっつい！」

私は、うちわで床をバチバチたたきながらさげんだ。

「暑い、暑い言うな。余計暑くなる」

向こうから、父ちゃんの面倒くさそうな声がした。どうやら、さつきから茶の間で書類と格闘しているらしい。そんなこと言われてもだなあ、やっぱり厚いもんは暑いんだよ。ああ、この暑さ、なんとかならないかな……そうだ。今、母ちゃんも兄ちゃんも出かけてるから、父ちゃんに頼めば、こっそり何か冷たい物くれるかも知れない。私は、はうようにして茶の間へ行った。

「父ちゃん、やっぱり暑い。なんか詰めたいも、の……？」

おおっ！？ 兄ちゃんっ。さつき出かけるとか言つてたくせに、いつの間にか帰つたんだ？ それに、

「父ちゃん、兄ちゃん、そ、それは、その手に持っているのはまさか、棒つきアイス！」 涼しげな水色、それはまさしくソーダ味の棒つきアイス！ 二人は、そのうまそうなアイスを、私に

見せつけるかのように食べていた。父ちゃんが、ぎくりとしてこちらを見た。

「し、しじみ。お前向こうにいたんじゃ……」 あわてる父ちゃんをしりめに、兄ちゃんはのんきにアイスをかじる。

「いやあ、夏はやっぱりアイスだな。あ、言っとくけど、しじみ、お前の分はないぞ」

……おい、兄ちゃん。そりやどういうこつちゃ。

「あー、そ、それはだな、しじみ」

父ちゃんが、言い訳がましく口をはさんだ。「おれがねぎ男に、一〇〇円やるからアイス買ってきてくれって頼んだんだ。棒つきアイスは一本五〇円だからなっ、残った五〇円はねぎ男の好きにしている……おれ、そう言ったんだよな、ねぎ男。それでねぎ男、お前はその五〇円で、自分のアイスを買ったんだよなあっ」

父ちゃんは、半ばすぎるように兄ちゃんに言った。が、そこに兄ちゃんの姿はなかった。兄ちゃんのやつ、私に内緒でアイス食べたのがバレたから逃げたんだ！ くつそお、本っ当に調子いいんだから。そんな事ばかりしていると、後で天罰が下るぞ、兄ちゃん。

一方、味方に逃げられた父ちゃんは、おろおろと言葉を探している。

「ああー、ええつとだな。これは、お前に隠して食べていた訳ではなくて……」

「父ちゃん、言い訳はなしっ！」

私は、わざと厳しい声を出した。

「……分かった、分かったよ。お前に隠れてアイスを食べたのは誤る。悪かった」

「それだけ？」

「あ、いや……仕方ねえなあ。ほれ、五〇円。アイスは自分で買ってこい」

やった！ 私は心の中でとび上がった。

「父ちゃん、ありがとう！ さっすが私の父ちゃんだねっ」

私は言い終わらないうちに、もう駆けだしていた。でも私の高性能の耳は、父ちゃんの、「しじみのやつ、どんどん母ちゃんに似てくるな……」  
というつぶやきを聞き逃しはしなかった。

「悪かったね、母ちゃんに似て」

私が玄関の前から奥に向かってさけぶと、父ちゃんがおどろいて、ゴトツ、と何かにぶつかる音がした。

「棒つきアイス一本くーださい」

私は、うちの近所の駄菓子屋へ行った。ここは小さな店だけど、品ぞろえは結構いい。小さなアメ一個から、どデカい景品の当たるくじまで、ほとんど何でも売ってる。そして、店を切り盛りしているのは、父ちゃんが産まれた時から顔が変わっていないという、すごい噂があるばあさん猫だ。

「はいよ、ソーダ味だね。一本五〇円だよ。当たりが出たらもう一本」

ばあさん猫は言いながら、私にアイスを手渡してくれた。そうそう、アイスの棒に書いてある当たりくじ、みんなこれが楽しみでもあるのだ。めったに出ないけど。

「どーも」

私は、五〇円をばあさん猫に渡すと店を出た。いやー、やっぱりおいしいなあ。輝くお天道様に空色のアイス。ぱくぱく、ぱくぱく。ああ、もう食べ終わってしまう。これで最後のひと口だ。

一気にかぶりつく。口の中に広がった甘味が、冷たさと一緒にすべり落ちる。「あーっ、うまかったあ」

さあて、棒に当たりはついてるかな……。とお！？ こ、これは、まさに当たりくじ！ 「当たり」の文字が輝いて見える。

「や、やったあ！」

やっと実感がわいてきて、私は思わずとびはねた。そして、そのまま家へと駆け出す。

「すごいすごい！」

……。あれ？ でも私、何でこんなに運がいいんだ？ あっ、そうか！ 父ちゃんを見捨てて逃げた兄ちゃんに当たるはずだったバチが、幸運に変わって私のところに来たんだっ。「わあい、兄ちゃんのバチ、ありがとう！」 私は、ひときわ高くとび上がった。でも兄ちゃんは私に隠れてアイス食べたんだ。この当たりくじ、絶対兄ちゃんに見せてあげない。

私が家に着くと、母ちゃんが帰っていた。

「母ちゃん、ただいまー」

「ああ、お帰り、しじみ。さっきねえ、八百屋さんの前で、かんぶつ屋さんの奥さんに聞いたんだけど、今日花火大会があるんだって」

「あっ、それ、昨日回覧板で見たよ」

「あれ、そうだったの。……。じゃ、今日は三階に行って花火見るからねえ」

わが家に正式な三階はない。じゃあ、どこを三階と呼ぶかと言えば、それは屋根の上だ。人間という生き物は、どうも屋根を活用していないようだけど、私たち猫にとって、屋根は部屋のひ

とつなのだ。

「わーっ、やった！ 今夜は晴れるといいな」 私の心は、ますます高鳴る。今から夜が楽しみだ。

「はいはい、枝豆持ってきましたよ」

母ちゃんが、三階 屋根に上がってきた。夜の屋根の上は、父ちゃん、母ちゃん、私、父ちゃんの友達で医者のおさちゃん（私は本名を知らない）や、その他近所のみなさんなど、猫でこつた返している。なぜか、知らないうちに増えていたのだ。父ちゃんは昼間のアイス事件など忘れたふりをして、医者のおさちゃんと、ちびちびお酒を飲んだりしてる。

「しめ治くん、ぼくの持ってきたお酒、どうかな」

医者のおさちゃんが、父ちゃんに話しかけているのが聞こえた。と、そこにかぶさるように、大きな花火が上がった。

「お、始まった、始まった」

誰かが言つて、みんないつせいに夜空を見上げた。大きい、小さい、花火がドーンと上がつては、バラバラと散っていく。

「きれいだなあ」

私がつつとりとつぶやいた瞬間、後ろから、ドンッ、と肩をたたかれた。

「うおっ」

屋根から落ちそうになって、私は危ういところでふみとどまった。

「へへっ、落ちなかったなあ」

兄ちゃんの声だ。ぱつとふり向くと、案の定、兄ちゃんが立っていた。

「兄ちゃんっ、あぶないじゃん！ 落っこちるかと思った……」

「まあ、そう怒るなよ。お前、猫だから落ちても平気だろ？」

まあ、そりゃそうだけどさ……って、ちがう！ もう少しでごまかされるところだった。「それよりっ。兄ちゃん、今までどこに行ってたの」

「そうよ。ねぎ男、あんた一体どこ行ってたの」

母ちゃんまで口をはさんできた。

「あちゃー、母ちゃんも聞いてたのか」

兄ちゃんは顔をしかめた。

「……これを買に行ってたんだよ」

兄ちゃんが、持っていた袋から何か取り出す。出てきたのは、ほかほかの焼き鳥がたくさん。

私が思わず、

「わあ、おいしそう」

と言った時には、もう、そのうまそうな焼き鳥に、みんな、わっと群がっていた。

「だから言うのいやだったんだよなあ……」

という、兄ちゃんのつぶやきが、かすかに聞こえた。でも、兄ちゃんは、ちゃっかり自分の分を四本（私は三本）も確保していたし、みんな口ぐちにお礼を言われて、まんざらでもなさそうだ。

そして、私は、

「半日走り回って、安くてうまいのを見つけたかいたな」

という、兄ちゃんの満足げな第二のつぶやきを聞いた。

私は、兄ちゃんの横顔を見ながら、昼間当たったアイスのくじ、兄ちゃんにあげてもいいかな、と思った。実は、かなり前にも一回当たりが出て、ずっとしまっただけあるのだ。二人で一本ずつ食べたら、一人で食べるより、ちよつとだけうれしいかも知れない。

暗い夜空に散る花火は、ぽっかり浮かんだお月さまよりなお明るく、私の心を照らしていた。

おわり